

※無断転載はお断りいたします。

『私のお姫様2（土の精編）』

作 あねとあなた

いつも、笑っていて、優しい、私の国のお姫様。秋までは、一緒にお勉強してたわ。お姫様は料理が得意なの。だから、ハムスターや土の精である私の仕事、植物を育てる事を手伝ってくれるの。

秋が終わる頃、お姫様は病気を治す為、病院へ入院されたの。皆、心配していたわ。幸いにも、手術は成功したの。なのに、お姫様は泣いてばかり。学校の先生が、優等生の火の精と雪の精に、

「お見舞いに行っちゃおうだい。」

と言ったわ。私はそれを聞いて言ったの。

「私も連れて行って。」

そして、私はお姫様に会ったの。傷跡を気にされていたわ。

「王子様と結婚できなくなっちゃう。」

まあ、なんてこと！と思ったわ。私は持っていたバラの花を渡せなかった。その代わりに、お姫様の喜ぶ物を探して笑顔にするわ。私には傷が消せないんだもの。今のお姫様には、バラの花よりももっと違う何かを贈りたい。

私は森に入ったわ。冬だから、なんだか怖い。だけど、私は妖精なのに空が飛べないの。でも、お姫様の心を元気にするため、進むわ。魔女に会いに行くの。でも、心細いな。

「火の精や雪の精について来てもらえばよかった。」

と思ったけど、二人は飛べるので一緒に来てはくれなかったでしょうねえ。妖精で飛べないのは私だけ。でも、飛べなくてもお姫様は、

「土の精、自分を嫌いになっちゃダメよ。」

と励ましてくれた。

—— いつも

いつも

だから、今度は私が… お姫様を助ける番…。

だけど丸一日歩いたけど、魔女の家には辿り着けなかったの。その日は食事に、クルミとぶどうのジュースをとり、そして種を育て、木の家を作り寝たの。次の日また歩いたわ。そして、そのまた次の、次の日に、ついに魔女の家を発見したの。もう、日が暮れていたせいか家全体が光ってたわ。

“コンコン”

私はドアを叩いたわ。ふくよかで白髪魔女が扉を開けてくれたの。私は魔女に贈り物の事を話したわ。魔女は言ったわ。

「お姫様の病気は治っても心の傷は治らなかったのね。」

私は、

「心の傷？胸の傷じゃなくて？」

魔女はワインを飲みながら、

「手術で跡が残った。病気と引き換えに美しい肌を失ったのよ。」

私は思わず、

「それでも、お姫様はこの国一番のキレイな女の子よ。」

と言ったの。魔女はタンスの一番上を開け、私に小箱をくれたの。

「これは何？」

魔女は教えてくれなかったわ。でも、ただ一つだけ教えてくれたわ。

「土の精ががんばったから必ず、お姫様が笑えるようになる物。」

と。私が頑張る。それでお姫様が元気になるのなら。こんなハッピーな事はないわ。

私は魔女にお礼を言ったわ。魔女は、

「土の精、森の入り口まで送るわよ。」

魔女は森の外には出られないから、森の入り口まで、ほうきに乗せてもらったわ。

「土の精はお姫様が大好きね。」

私は頷いたわ。また、一緒にハムスターを育てたり、植物を育てたいの。

城を目指して、小箱を大事に抱えながら、私は笑っていたお姫様の素敵な笑顔を送り出したの。陽がまた沈みだしたわ。急がなくちゃ。お姫様、私が笑顔にしてあげる。待っててね。